

FUJITSUファミリー会をもっと楽しく活用していただくための様々な情報をご提供します。

## 富士通からのお知らせ

## 富士通が取り組む人権尊重 ～人権ステートメントの改定～



富士通株式会社  
執行役員 EVP CSO  
梶原 ゆみ子

### 改定のお知らせ

近年、強制労働や差別などの人権に関する問題がグローバルに取り上げられ、法規制による企業への対応義務化など、企業の「人権尊重の責任」がますます問われるようになってきています。富士通グループは、Fujitsu Wayの中の、「行動規範」の一つ目に「人権を尊重します」を掲げており、これに基づいてビジネスに取り組んでいます。そして、2022年12月に人権尊重に対する考え方や取り組みをお客様や社会に明示する「富士通グループ人権ステートメント」を、2014年の制定以来8年ぶりに改定しました。

### 人権尊重に関する富士通の取り組み



### 梶原CSOメッセージ

#### ～なぜ今、「人権尊重」が求められるのか～

国際社会では「ドイツ サプライチェーンにおける企業のデューデリジェンス義務に関する法律」の制定や「EU企業持続可能性デューデリジェンス指令案」の発表などにより、体制整備やリスク分析の定期的な実施など、人権尊重への対応が義務化されつつあります。企業に対する人権への取り組み要求は、国際的に厳しくなっており、その範囲は自社に加えてサプライチェーンにまで拡大しています。

今回、「富士通グループ人権ステートメント」を改定し、国際規範への支持を明記するとともに、ステークホルダーに対するコミットメントや、富士通の人権尊重のための取り組みを明文化しました。

また、富士通は今年、グローバルで人権影響評価を実施しました。これは、人権尊重のための取り組みとして、人権ステートメントにも記載されている人権デューデリジェンスのプロセスの一つです。第三者による社内部門へのインタビューやデスクトップリサーチから、バリューチェーン上のステークホルダーに対する人権影響リスクの特定と、事業との関連性などから優先順位付けを行い、私たちの日々の活動やビジネスに潜む人権リスクを明らかにしました。社員・サプライヤー・お客様に関する課題は重要度が高く、さらに事業との関連性も高いため、優先して防止・軽減に取り組んでいきます。

### 改定のポイント

今回改定された人権ステートメントは下記の5つの項目から構成されています。

1. 国際規範の支持
2. 適用範囲
3. 人権尊重へのコミットメント
  - 3.1 社員における人権尊重
  - 3.2 サプライチェーンにおける人権尊重
  - 3.3 お客様および製品・サービスにおける人権尊重
  - 3.4 その他のステークホルダーや人権課題へのコミットメント
4. 富士通の人権尊重への取り組み
  - 4.1 適用法令の遵守
  - 4.2 人権デューデリジェンスの実施
    - 4.2.1 人権影響評価
    - 4.2.2 負の影響を防止・軽減する取り組み
    - 4.2.3 取り組みの有効性の確認
    - 4.2.4 情報開示
  - 4.3 救済措置
  - 4.4 教育と社内外への啓発
5. ガバナンス

国際規範への支持を明記するとともに、取引先、お客様を含むサプライチェーンのすべてのステークホルダーの人権を尊重することを約束しています。また、人権尊重のために富士通がどのような取り組みをしていくのかも示しています。

### 会員企業の皆様とともに

国際的な人権意識の高まりや個人の価値観の多様化、法規制などによる企業への対応義務化により、私たちのビジネスにおける人権尊重の重要性はさらに高まっています。人権ステートメントに記載のとおり、様々な取り組みを進めていきますが、個社のみでの活動ではグローバルな要求に応えることはできません。サプライヤー様やお客様を含むバリューチェーン上のすべてのステークホルダーとの協力、対話が不可欠です。ファミリー会員の皆様にも本ステートメントにご賛同いただき、ともに人権尊重の取り組みを進めていけますと幸いです。

NEW FAMILY

(1～3月度ご入会分)

■中国  
青山商事(株)

■九州  
(株)システムオーディット

## 2022年度 入賞論文

2022年度は一般論文9編、新人賞18編の応募があり、論文委員会による厳正な審査の結果、入賞論文は次のとおり決定いたしました。(最優秀論文は該当なし)

ファミリー会論文サイト <https://jp.fujitsu.com/family/article/>にて、入賞論文を掲載していますので、ぜひご覧ください。

### 優秀論文 (賞金25万円)

#### 保険金・給付金等の請求手続のデジタル化

～1時間でお支払いまで完了～

■ T&D情報システム株式会社

事業三部 収納システム課 課長代理 水野 祐輝氏

事業三部 支払システム課 課長代理 高橋 幸太氏

テクニカルサポート二部 IT 基盤開発課 清水 千翔氏

### 秀作論文 (賞金10万円)

#### 新たな働き方を踏まえた コールセンター業務の改善

■ T&D情報システム株式会社

事業三部 担当課長 早田 英邦氏

#### 大規模システムの保守性を高めるサービス化・ API化技法の段階的な適用について

■ 四国電力株式会社

情報システム部 基盤開発・最適化グループ

網干 誠氏/田中 和也氏

#### 次世代店舗改革と銀行のオープンAPI に取り組む 『店頭タブレット開発』について

～DX推進と勘定系開発に必要な堅牢性の中で  
目指すべき開発スタイルとは～

■ みずほリサーチ&テクノロジーズ株式会社

IT本部 第1事業部 第3部

塩川 真由氏/小澤 晃歩氏/鷹野 洋氏/

新貝 良史氏/藤咲 恵美子氏

### チャレンジ賞 (賞金3万円)

#### 日本企業で働く外国人が 感じた日本の会社の特長

■ 株式会社アイネット

R&D 推進室

Pazos Urrea Juan Pablo氏

### 新人賞 (賞金3万円)

#### 初めてのロボット開発プロジェクトで学んだ 「社会人に必要な心構えとコツ」

■ 株式会社ITAGE

SI事業部 TS部 AI-LabsG 佐橋 杏奈氏

#### Webサイト新規構築プロジェクトを通じて 学んだこと

■ ENEOSシステムズ株式会社

システム2部

小川 恭子氏

#### 社内端末更改における 新入社員の取り組みについて

■ T&D情報システム株式会社

テクニカルサポート二部 IT 基盤開発課

小幡 亮介氏/岡本 福也氏

#### システム運用・保守サポート業務の 改善活動を通して学んだこと

■ オリオンシステム株式会社

ビジネスインテグレーションサービス部

竹内 彩也香氏

#### リーダーとしてシステムの設定変更 などの対応をする中で学んだこと

■ オリオンシステム株式会社

ビジネスインテグレーションサービス部

米沢 唯那氏

#### 「価値を伝える営業」を実践して

■ 株式会社アイネット

総務人事本部 人事部

佐々木 真帆氏



## 優秀論文概要

### 保険金・給付金等の請求手続きのデジタル化

～1時間でお支払いまで完了～

T&D情報システム株式会社



水野 祐輝氏 高橋 幸太氏 清水 千翔氏

#### 概要

大同生命ではお客様の機器（デバイス）からインターネットで保険金・給付金などの請求手続きが可能となる「つながる手続」を開発した。当システムは、保険金・給付金の手続は1時間、解約の手続は5分でお支払いまでを完了できるサービスであり、コロナ禍における非対面による手続方法の確立と、請求件数増加に伴う本社・支社事務の負担を軽減することに成功した。

サービス提供にあたり、お客様がより使いやすいサービスとするため、積極的に外部ソリューションも活用。従来の紙手続に代えて、お客様の手続後に不備が発生しづらい手続画面の設計や、サービス利用時間の拡大を実現した。また、手続データは従来の本社システムへの連携・処理を可能とすることで、システム保守性の確保と開発全体のコストダウンも実現できた。

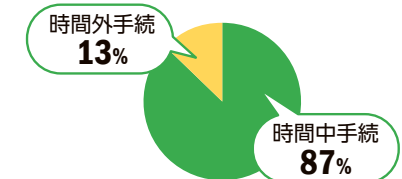
本論文では「つながる手続」の開発過程と開発内容を紹介します。

#### 開発効果：お客さまサービスの向上（抜粋）

##### (1) 時間外手続機能の提供

「つながる手続」の提供により、大同生命では請求手続において非対面による手続の選択肢が新たに加わった。法人向けの生命保険を主に販売する大同生命において、日中の忙しい経営者の手間を取らせることなく自由な時間に手続を済ませることができるようになり、手続に必要な時間を大幅に短縮することができた。

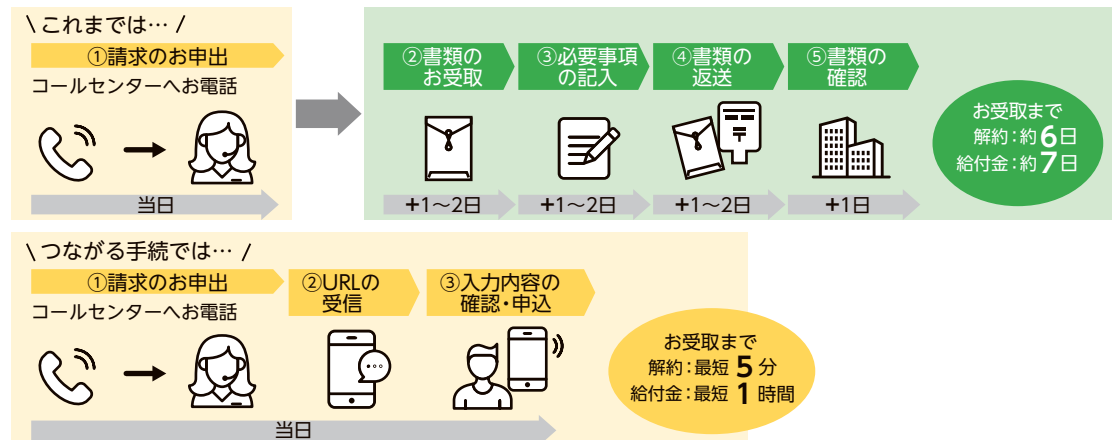
図：手続時間帯の分類



##### (2) 手続に必要な時間の短縮

「つながる手続」の導入により、郵送・返送にかかる時間と本社での確認時間が大幅に短縮できたことで、解約で最短で5分、保険金給付金でも最短1時間後にはお客さまの口座へ送金まで完了できるようになり、手続に必要な時間を大幅に短縮することができた。

図：手続所要日数の短縮



#### 受賞者コメント

優秀論文に選出していただき、ありがとうございます。

本論文は「請求手続のデジタル化」の案件をテーマとし、実際の開発を担当した3名で執筆しました。

検討期間を含め約3年にわたるプロジェクトでしたが、開発期間中に苦労したところ

や改善できそうな点について、あらためて議論を重ねながら進めました。

開発の振り返りを実施するうえでも、論文執筆はとても良い機会となりました。

当論文の執筆および実開発で得た経験を活かし、今後もさらなる「お客さまサービスの向上」と「業務効率化」へ貢献できるよう、システム開発に尽力していきます。